AMCoR
Asahikawa Medical University Repository http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/

看護研究集録（2014.12）平成２５年度:103.

難病消化器系疾患患者が人工肛門造設を決定した要因と造設後の思い

稲葉 留奈, 青沼 佑未子, 中村 一美, 瀬川 澄子

難病消化器系疾患患者が人工肛門造設を決定した要因と造設後の思い

旭川医科大学病院　看護部　　○稲葉　留奈、青沼佑未子、中村　一美、瀬川　澄子

【目的】

難病消化器系疾患患者の人工肛門造設の思いを明らかにする。

【方法】

看護診断「不安」「ボディーイメージの混乱」「知識獲得準備状態」にもとづき人工肛門増設に対する思いについて面接を実施した。得られたデータを意味ある文節にまとめカテゴリー化した。

【結果】

対象者はクローン病、潰瘍性大腸炎、難治性痔瘻の男性患者３名。カテゴリーから３つの主要カテゴリーを抽出した。

１.「症状からの回避による代償としての意味づけが出来る」排泄機能の低下や下血による体力の消耗から「血が出続けどうなるのか」「痩せて体力がなくなってしまう」「トイレにこもる時間が長い」〈症状が改善しない不安や葛藤〉が見られた。短腸症候群により「IVH の感染を繰り返している」「腸が短くなりこれ以上手術が出来ない」長期の下血にて「大腸を取ると治る」「ストーマを付けた方が楽になる」「食べられるようになる」〈ストーマにて症状緩和による安寧と期待〉を抱いていた。

２.「周囲のサポートを自覚しコーピング促進が出来る」「同じ病気の妻の経験が役に立つ」「患者同士での情報交換がある」〈経験者からの言語的説得〉「職場で付けている人がいる」「WOC からの情報で理解が深まった」〈同病者及び医療者からのサポートや有益な情報〉にて効果的な対処行動が見られていた。

３.「人工肛門の生活による有益性と自己実現の欲求が高まる」「便から血が出ないことを確認でき安心だ」〈自ら確認できる安心〉「トイレの心配が無いから旅行に行ける」「仕事に戻ることが出来る」〈行動制限からの解放〉を実感していた。

【考察】

難治性消化器系疾患患者は、慢性的な経過をたどり多くの日常生活上での困難感を抱いていた。人工肛門造設は、QOL を維持するための治療の一環として受け入れ自己決定に至っていた。トイレを気にしないという排泄コントロール感の獲得と、下痢、下血肛門周囲の疼痛などの自覚症状の解放されることが精神的負担を軽減し、前向きな対処行動が図れていたと考える。